高森邦明著
「作文指導法の理論」

著者高森邦明氏には、すでに「作文教育の探究—目標と方法の原理—」（昭40）の著がある。題名どおり、前著が原理探究の書であったのに対し、本書は、その方法論の具体的展開の書である。著者自らは、「あとがき」に、本書が単なる「作文法」の類ではなく、といって、実践集録の類でもない、実践のための真の立脚点となりうる指導理論のテキストとして読まれることを期待する旨、述べておられる。

序　章　作文指導へ近づく
第一章　取材指導
第二章　構想指導
第三章　記述指導
第四章　記述指導における指導事項
第五章　評価活動の指導の基本
第六章　点検作業の方法
第七章　加筆・批評作業の方法
第八章　公開・補足作業の方法

内容の特色は、右の目次からも想像されるごとく、作文の表現過程の全域にわたり、その制作の展開過程にそって、指導理論、指導法が整然と記述されている点にある。そこには、筆者のかつての豊かな実践経験と、研究者としての幅広い視野の中にとらえきたった多くの実践研究、理論研究の検討と、深い思索とによって選び出された指導の基本的方法が体系的に示されている。指導法の基本にどんなものがあるかということが、表現過程、指導過程の全領域にわたって、これほど網羅的に示されている書は多くない。しかも、それは網羅的というより、シンメトリックな美しささえ感じさせる体系のみごとさをなして記述されている。その意味で、これはまさにテキストであり、すぐれたハンドブックでもあるといえよう。

しかし、本書の全内容を生かして、真にすぐれた実践を生み出すためには、この著者の作文指導に対する立場をはっきりと理解しておく必要があろう。それは、前著の「作文教育の探究」にくわしく語られているところであるが、P・ガレーのThe Teaching of Written Englishに代表される英国の作文教育の原理がふまえられているということである。著者は、「豊かに書く力を伸ばすには豊かに書かせなくてはならない」（本書158ページ）と述べて、文章表現の形式的訓練や、表現法の基本を学ばせることを目的とする練習作文よりも、具体的な生活作文を豊かに書かせることを作文指導の基本にすえる。本書の構成が取材にはじまって書くことの指導のプロセスの全域に及んでいるのは、実は、その「作品活動」（118ページ）主義の立場そのものの現われであるといえる。さらに、本書が「評価・点検・加筆・批評・公開・補足」という記述後の指導面に他書にない力点をおいているのも、具体的な作品を書く活動を児童生徒の集団生活の中に位置づけて、集団指導を通して書く生活を確立しようとする意図の現われにほかならない。その意味で、本書は、現今の作文指導の新しい方向を示すものでもある。

（昭和49・4、明治図書刊、A5判一九四ページ、一四〇〇円）

（小田迪夫）